はじめに

一橋大学スポーツ科学研究室では、今年度も、年間を通して、本研究室のスタッフがそれぞれの研究テーマを追求するとともに、尾崎を研究代表者とする科研費「グローバル化する社会におけるスポーツと多様性に関する研究」に基づく共同研究を進め、定例研究会などの場で報告、討論を重ねてきた。そうした研究活動のうちから、いくつかが本年報において論考として掲載されている。

同時に、本研究室では従来から「ゲスト研究会」の名称のもと、スポーツ研究にとどまらない幅広い研究領域の学内外の研究者をお招きして、研究交流を図り、新たな知見を得て、その後の研究上の刺激を得ることをねらいとして実施してきているが、今回は 2 回のゲスト研究会での報告を元とした論考を掲載することができた。

まず、本学社会学研究科の堂免隆浩先生の報告では、研究領域、分野は異なるものの、提示された研究対象とその考察の視点は、ゲスト研究会の趣旨の通り多くの刺激を受けるものであった。

また、独立行政法人日本スポーツ振興センター情報・国際部企画運営課の先任研究員である阿部篤志先生には、トップアスリートの育成等に関する現状について報告をいただいた。スポーツを研究対象として同じくすると言っても、ふだん私たちが直接的に取り上げることが少ないテーマについてグローバルな視点からの多岐にわたる報告は大変興味深いものであった。

内容の詳細についてはそれぞれの論考をご覧いただきたいが、ご多忙の中、研究会での報告、および本年報への掲載にあたって校正等の労を執っていただいたお二人の先生にはあらためてお礼を申し上げたい。

今年もさまざまなスポーツをめぐる出来事があったが、とくに目立つのは、2020 年のオリンピック・パラリンピック大会の“1000 日前”のカウントダウンなど、大会に向けた関連イベントの開催があふれるようになったことであろう。また、日本選手のメダル獲得の前景気をあおるようなメディア報道がかまびすしい。

私たちは、こうした動きに向き合いつつも、地道に足下を見つめた研究を継続し、その成果を今後とも積極的に発信していきたい。

2017 年 11 月 30 日　　一橋大学スポーツ科学研究室室長　尾崎　正峰